

優秀賞（京都府教育委員会教育長賞）

僕たちが忘れてはならないこと

宮津市立宮津中学校 三年 岡田 勇斗

「領土問題」。これは、今の世界を代表する問題の一つである。そして、残念なことに日本にも関わりの深い問題である。日本の領土問題を挙げると、尖閣諸島、竹島、北方領土などきりが無い。これだけあるということは当然、日本にとって領土問題は重要である。ここでは、その中の北方領土問題を中心に考えていきたい。

北方領土とは、択捉島、国後島、色丹島、歯舞群島をはじめとする島々のことである。これらの島々は、もともと日本固有の領土であった。しかし、第二次世界大戦によって、この考え方は世界的に大きく変わってしまった。大戦の終了間際、当時のソビエト連邦によって不法に占領され、現在のロシアに引き継がれ、今に至っているのである。そして今、日本の返還要求に対してロシアは強硬な姿勢で臨んでいる。

そもそも、なぜ大国ロシアがこの島々にこだわるのか。僕は、そこに疑問を抱き、いろいろ調べてみた。

その答えは、大きく二つあるだろう。一つは、海洋資源。そしてもう一つが、現在北方領土に住むロシア住民への対応だ。この問題を解決することができれば、おそらく北方領土問題は大きく前進するだろう。

僕がここで必要となってくると考えるのが、「共存」という方法である。もしこれが可能になれば、双方に多くのメリットがある。まず日本側のメリットとして、漁業範囲が拡大し、ロシア政府にも行政コストを求めることができる。一方、ロシア側にも、日本からの官民を問わずの投資や援助が期待でき、貿易の拡大も望めるのである。そして一番救われるのが島民だ。

こうすれば、元々の日本の島民、また現在のロシアの島民がどちらも分け隔てなく暮らせ、占領前に最も近い状況に戻るのである。新・旧どちらの島民も島を愛する心に違いはないはずだ。この心があれば、「共存」は可能な考えだと思う。

しかし、この問題は現状として日本とロシアの間で平行線をたどっている。このままでは両国の関係に前進は見込めない。この現状を打開するには、日本政府が交渉を進める上での支えが必要なのだ。太い支えを築くためにも、まず国民がこの問題を国民全体の課題として捉えることである。それが成し得た時、日本政府は、どんな事にぶつかっても太く丈夫な支えによって決して倒れることはないだろう。

今、僕は実現したい。全国民がこの問題に向き合い、声をあげること。そして、国が動き出すことを。そうすれば、北方領土問題はより良い方向へ前進するであろう。しかし、僕達は忘れてはならない。これからのこの問題を動かすのは、僕達全国民の小さな一声からであることを。

優秀賞（京都市教育委員会教育長賞）

私たちの大きな力

京都市立嵯峨中学校 三年 軽尾 貴子

ニュースでよく北方領土の問題について多く取り上げられています。けれど私は、北方領土についてよく知りません。ロシアに占領された、今もまだ返されていないということしかわからないのです。なので、この作文を書くためにニュースやインターネットで北方領土の問題を調べました。そのことを今から話していこうと思います。

第二次世界大戦で日本がアメリカに原子爆弾を落とされ、もう戦うことができなくなったとき、ポツダム宣言を受け入れました。そのことがあったあと、ソ連が北方四島に侵攻し、日本人たちを無理やり追い出して、自分たちの国の領土にしました。ソ連からロシアにかわった今でも、まだ占領されています。そのため日本は、北方領土を返還してもらうために話し合いなどをして交渉を求めているところです。

北方領土を返還してもらわないとある問題が出てきます。それはどういうものかという、漁業に大きく関わっています。漁業をするとき、魚がとれる範囲が小さくなってしまい、魚の量が減ってしまうという問題です。日本にとってこの問題はとても深刻になっています。この他にもたくさん問題があります。このようなことがあるので、日本は早く北方領土を返還してほしいと願っているのです。

今の自分は、何ができるのか、何をしたらいいのかよくわかりません。しかし、日本にとって北方領土は、大事な大事な日本の領土です。今、日本の各地に北方四島に住んでいた人たちが、少しですがおられます。その方たちがもう一度、自分たちが生まれた土地で過ごすことができるようにしていかなければなりません。自分が生まれた土地に行くことができない悲しい気持ちがよくわかります。同じ日本で一緒に暮らしている人々が、一人でも悲しい思いを抱いているのは、よくありません。

私たちは、政治家のような権力はありませんが、言葉で訴えることはできます。なので、一人一人が発言できるようにし、その意見を聞いた政治家たちが行動するというようにしていいたら、北方領土返還に一步でも近づくのではないのでしょうか。助け合い、人のために行動する日本にみんなできていけば、必ず願いは叶います。自分は無関係とかではなく、一人一人の力が大きな結果となっていくので、協力していきましょう。

優秀賞（北方領土問題対策協会理事長賞）

一人一人の意識を高めれば

京都市立嵯峨中学校 三年 岡本 絢香

「わたしたちの国土を調べよう」これは小学五年生の弟が、学校の社会の時間に勉強している項目だ。北は北緯四十五度三十三分、択捉島の端までが日本の国土であると学習する。ロシア連邦に占領されている四つの島の総称を北方領土ということも習っている。弟に、北方領土について質問したら、学校で学習したことがそのまま答として返ってきた。北方領土は、日本領なのにロシア連邦が占領していることに、弟は特に疑問をもっていないようだ。それについて、授業中だれからも疑問の声はなかったそうだ。

私は中学校に入り、小学校より深く北方領土について勉強した。中学三年生の今年で、北方領土の作文を書くのも三回目となる。この作文を書くとき、私は再度北方領土について考える機会を得ている。

思い起こして見れば、中学一年生のときに初めて北方領土が戦後ソ連に侵略され、家や土地を奪われてしまった島の人々の存在を知った。その人達は、何も持たないまま故郷の島を後にし、それから島に戻ることに出来ない現状に心を打たれた。年老いた人達が島へ戻って墓参りをしたいという希望さえも叶えられない。今は墓の方角に向かって手を合わせるのみだ。二年前、私は年老いた人達が年々年老いて亡くなる前に、故郷に戻り墓参りが出来たら良いという希望を作文に書いた。

しかし、二年経過した今も取り立てて北方領土問題が進展しているニュースはない。この二年の間にも、故郷を思い無念さを持ち亡くなった人が何人いるのだろうか。その人達のことを考えると、歯がゆく、気の毒でならない。一年前の作文は、前原外務大臣が北方領土問題の早期解決に意欲を燃やしていることへの期待を書いた。しかし、はっきりした北方領土問題の解決もなく外務大臣は交代した。

反面、大きな変化はなくとも、北方領土のロシア住人の患者や医師・看護師を日本が受け入れるなどの小さな活動は行われている。「点滴石を穿つ」ということわざ通り、小さなことの積み重ねが実を結べば良いと思う。私たち中学生が毎年、北方領土についての作文を書き、元来日本国土である北方領土について考えることも意義のあることだと思う。

二月七日の「北方領土の日」を知っている国民はほとんどいないと思う。だから、この日を休日にし、日本国民全員が北方領土について身近な問題として考える日としたらどうだろうか。国民の意識の向上で問題の位置づけを高くして、早い平和的解決ができれば良いと思う。

優秀賞（北方領土問題対策協会理事長賞）

「北方領土に思うこと」

亀岡市立東輝中学校 二年 小山 輝

北海道の納沙布岬から見える島に、北方領土の一つである歯舞群島がある。しかし、目の前に見えているこの島に、私たち日本人が渡ることはできない。仮に、渡ろうと思えば、一部の関係者を除いてビザが必要になってくる。これが、日本とロシアの間に存在する領土問題の現実である。日本は、南北に長い国のため、様々な国と接している。そのため、いまだに解決できていない領土問題が数多く存在するのであるが、その中でも、北方領土問題について考えてみた。

日本の外務省のホームページを見ると、「北方領土は日本の固有の領土である」と書かれており、アメリカ政府も公式見解で、北方領土の主権が日本にあることを認めている。それにもかかわらず、北方領土が返還されていないのは、日本とロシアの双方が自分たちの主張を引かないからだ。

日本としては、他国よりも早くから北方領土を開発してきたことが、主張の根拠として挙げられる。1644年に江戸幕府に献上された、「正保御国絵図」には、「くなしり」「えとろふ」「うるふ」の文字が確認できる。このころから既に日本は、北方領土に着目し、第二次大戦で敗戦してソ連に占領されるまで、独自の開発を続けてきた。

しかし、日本が歴史的な背景を根拠に領土返還を主張しても、ロシアは納得しない。なぜなら、現在、北方領土に住んでいるロシア人には、独自の生活環境が存在するからである。戦後60年以上も経って、今さら、島を出ていくことなどできないのである。

さて、この北方領土問題に解決策はあるのだろうか。まず、日ロ両政府による北方領土の共同管理を提案したい。島の海域で取れる天然資源やそこから得られる利益を分配することは、双方にとってマイナスとは言えないのではないだろうか。また、日ロ両政府間の協議が難航している現状を考えて、国連やサミットで取り上げてもらうことも重要となってくる。他国の視点を取り入れていくことで、問題解決の新たな糸口が見えてくると思う。北方領土問題をはじめとする領土問題には、明確な「答え」というのは存在しない。けれども、協議を粘り強く行うことによって、互いの価値観を越えた「答え」に少しでも近づくことができるのではないかと考える。

北方領土にビザを持たない多くの日本人が訪れることができるその日まで、私たちは、この問題に真正面から向き合わなければならないと思う。

優秀賞（北方領土返還要求京都府民会議会長賞）

北方領土返還運動

京都市立嵯峨中学校 三年 北村 敬祐

北方領土問題を解決するためには、ロシアとの外交交渉を粘り強く続けることが必要だと思います。しかし、この交渉を後押しする最大に力は、北方領土返還を求める僕たち国民の意見だと思います。

この返還を求める運動が北方領土返還要求運動です。この返還要求運動は民間団体や地元北海道の自治体を中心となって、署名活動や講演会など様々な取り組みが精力的に行われています。今では大きな国民運動となって全国で展開されています。政府も北方領土の返還を求める国民世論をさらに結集するため、北方領土問題を政府広報の重要テーマとして取り上げ、テレビ、ラジオ、新聞、インターネットなどのメディアを通じて全国民を対象に広域的な広報活動を行っているほか、関係団体と連携して様々な取組を行っています。

北方領土返還要求運動の始まりは、昭和二十年十二月一日、当時の根室市長の安藤石典が連合国軍最高司令官のマッカーサー元帥に対して「歯舞群島、色丹島、国後島及び択捉島は古くから日本の領土である。地理的にも歴史的にも北海道に付属するこれらの諸小島を米軍の保護占領下に置かれ、住民が安心して生業につくことのできるようにしてほしい」という旨の陳情書を取りまとめたことです。

このように、終戦直後に北方領土の元居住者をはじめ、四島と隣接する根室の人々によってあげられた北方領土返還要求の声は、やがて北海道全域、さらに全国各地へ展開していきました。

皆さんは北方領土の日を知っていますか。北方領土の日というのは、北方領土問題に対する国民の関心と理解を更に深め、北方領土返還要求運動の全国的な盛り上がりを図るための日です。政府は二月七日を北方領土の日と決めました。毎年北方領土の日には、東京で「北方領土返還要求全国大会」が、内閣総理大臣、各政党の代表、元島民、返還要求運動関係者などの出席のもとに開催されるのを始め、この日を中心に全国各地で多彩な行事が行われています。

返還運動の例に署名活動があります。これは国民の意志を直接表明する手段として、全国で行われています。平成二十一年度には八四万二百八名の署名が集まり、総署名数は平成二十二年三月末に八千二百一十万人を超えました。集められた署名は毎年国会に請願として提出されています。

僕は作文を書くまで返還要求運動のことがよくわかっていなかったけれど、少しわかってよかったです。返還要求運動は全国に広がってきています。しかし一人一人がもっともっとこの運動に興味を持たなくてはいけないと思いました。

優秀賞（北方領土返還要求京都府民会議会長賞）

北方領土についての思い

宮津市立栗田中学校 一年 池永 佳菜子

私達は、社会科の学習で北方領土問題について勉強しました。そこで、北方領土はもともとは日本のものなのに、ソ連に占領されている事を知りました。

今回の学習から映像や歴史を通して、世界大戦後の事だったり、島の人達との交流のことだったり、少しずつ返還ができるように頑張っている人達の姿が見えてきました。

そんな矢先、私は北方領土についての悲しいニュースを聞きました。それは「島に住んでいるロシア人が、北朝鮮人や中国人を島に雇っていた。」というものでした。大きく報道されてはいなかったのですが、「こんな事あったんやなあ」ぐらいにしかなることができなかつたのですが、アナウンサーの最後の一言

「これで日本への返還がよりいっそう難しくなった。」と言う声を聴いたとき、私は言葉に言いあらわせないほどショックを受けました。

現状では、話し合いをしても、手紙を書いたりしても、足踏み状態が続いています。そして、今まで、何百回と話し合いをしても解決されてきませんでした。解決できない理由は、どちらの国ともお互いの気持ちをわかろうとせず、どちら国ともお互いの意見を尊重できていないからではないでしょうか。

この問題は、正直言って、簡単に解決される問題ではないと思います。どういう解決方法がいいとは言いきれませんが、どんな解決方法にしても、両方の国の気持ちを理解し合うことがこの問題解決への一歩ではないかと思っています。

今も、島の返還を求める人々がたくさんいます。私もその一人です。島がほしい、経済水域がほしいとかではなくて、そこに住んでいた人々の故郷を返してほしい。自分の育った島を返してほしいだけなのです。たとえ、長い年月がかかったとしても、島にあふれる笑顔が見えるまで、応援していきたいと思っています。

一刻も早く、島に住んでいた人達の笑顔が戻るように、日本中の人々に明るいニュースが届けられるように、ロシアとの関係、島との関係がよくなるように願っています。

優秀賞（京都新聞社賞）

北方領土問題について

京都市立勸修中学校 一年 奥野 有菜

みなさんは、日本の北方領土問題について知っていますか？北方領土とは、日本固有の領土である択捉島、国後島、色丹島、歯舞群島の事です。この四島は、現在勝手にロシアが占拠して「我が国の領土だ」と主張しています。

では、なぜ日本とロシアの両国がこの四島の帰属について争っているのでしょうか。また、どうしてロシアが日本の領土を奪い取ったのでしょうか。このことについて考えていきたいと思います。

まず、北方領土の周辺地域に目を向けてみましょう。北方領土周辺では、寒流の千島海流と暖流の日本海流がぶつかっています。そのため暖かい海でとれる魚と冷たい海でとれる魚の両方を水揚げすることができます。また、地下資源が豊富にあり、金、銀、銅なども採掘することが可能であるといわれています。これだけ恵まれた環境にある北方領土ですから、ロシアも手放したくないのです。また、二百海里経済水域の問題もあります。この四島を失うと、二百海里の水域もなくなるのですから、漁業面でも海底資源の面でも大きな影響を受けることになるのです。

次に、日本とロシアの条約面から北方領土の歴史について考えていきたいと思えます。当初、北方領土は日魯通好条約によって日本領と認められていました。その後、樺太・千島交換条約やポーツマス条約など様々な条約が結ばれました。そして何れの条約においても、北方領土は日本の領土であるということが確認されました。

しかし第二次世界大戦が終了した直後から、ロシアは日本との条約を無視して北方領土を占領したのです。その後日本と連合国の間でサンフランシスコ平和条約が結ばれましたが、ソ連はこの条約に参加せず、北方領土が日本に返還されることはありませんでした。

私が北方領土問題について強く思うことは、「日本の領土なのだから返してほしい」ということです。もともとは日本の領土なのに勝手に占領するという事は、他人の家に不法侵入して勝手に住んでいることと同じです。占領され、島を追い出された人の気持ちを考えてみて下さい。自分の故郷なのに自由に行き来することが許されない、自分が暮らしていたところに外国人が住んでいると思ったら、あなたはどんな気持ちになるのでしょうか。私なら絶対にいやです。しかし北方四島に住んでおられた皆さんは、今も我慢を強いられているのです。

未来において、私たちは社会を動かす中心的な立場になります。その時のために、私は北方領土問題について考え続けたいと思っています。

優秀賞（京都新聞社賞）

北方領土 日本側の問題点について

京都府立鳥羽高等学校 三年 油井 大悟

私は、北方領土問題は日本政府のロシアに対する返還要求が弱いことが解決できない理由の一つだと思う。

日本側としては、返還する根拠があるとしているにも関わらず、こうして何十年もの間、解決できないでいる。いくら日本が敗戦国であり、武力を持たなくても、言葉の力と、返還される正当な根拠があるのであれば十分解決できると思う。今、日本では北方領土問題に対する報道そのものが少ない。進展があればそれは日本にとっては良いことなので、メディアを通して政府から情報が提供されると思う。しかし、それがなくなると、私たちには政府は何もしていないようにしか思えない。また、交渉が行われていても、進展がないように思われる。

私は政府は、毎日のようにロシアに対し、交渉を行いそれを逐一情報公開すべきだと思う。それにより、国民の士気も上がったり、支持も得られそれがまた政府の力となると思う。たとえ返還が無理だとしても私たちにとって「政府は北方領土問題の解決に尽力した。」となると思われる。いずれにせよ私たちに伝えることのできるようなことを政府はしていないと思う。

故吉田松陰先生がおっしゃっていた「大和魂」というものを今、出すべきと思う。日本人が重視する「心」からの訴えが必要だと思う。心で分かり合えればロシアも要求に応じてくれるかもしれない。なので私は日本政府が、心から強い思いで返還要求をしてほしい。

また一つは、先にも述べたように、情報の少なさからくる国民の認知度の低さが影響していると思う。

私たちは北方領土問題について、学校の授業の中で習う。ただしそれは表面的なものが多く、「日本とロシアとの間にはこのような事実がある。」や、「日本の領土をロシアにとられてしまうことはよくないことだ。」など、とても抽象的である。それだけでは何がいけないのかが分からない。不法占領された北方領土が、日本やロシア、その他の国へどのような影響があるのか、その上でなぜ返還してもらわなければならないのか、それを深く知るべきである。政府や、ある一部の人たちだけがこの問題に取り組むのではなく、日本全体がこの問題に深く関心を持ち、取り組むべきである。このように作文に書いてみることも、関心を深める良い機会であると思う。広い世代でこの問題に取り組めば取り組むほど、一人一人思うことは違うのだから、解決への案が多くなってくると思う。政府に任せきるのでなく、私たち一国民も知識や情報を蓄えて、政府の後押し、手助けをすることで、解決の糸口が見えてくるかもしれない。逆に、それを実現させるために政府側から情報を公開し、是非を問うたり、助けを求めたりすればいいと思う。北方領土問題は、日本が一枚岩となって取り組むべき問題である。

優秀賞（KBS京都賞）

北方領土問題について考える

京都市立伏見中学校 一年 檜垣 梨里香

「北方領土」と言われて思いつくこと。それは北海道の近くにある四つくらいの小さな島であるということ。他の国と問題がおこっているということ。私の北方領土に関するこれまでの知識は、その程度に過ぎませんでした。

でも、最近の社会科の授業で「北方領土」について教わりました。島の名前だけでなく、歴史的な問題などが次々と出てきたので少しあせりましたが、その反面、北方領土問題の全体像と本質が理解できたように思います。また、この授業をきっかけに、北方領土問題に対する興味と関心を高めることができました。

北方領土問題を一口で表現すると、「第二次世界大戦後、ソ連軍によって択捉島、国後島、色丹島、歯舞群島からなる北方領土が不法に占拠され、現在もなおロシアの占領下にあるため、日本が返還を求めている問題」ということになります。私は今回の学習によって、北方領土問題に対する疑問と関心が膨れあがってきました。それは「これからロシアは北方領土をちゃんと返してくれるのだろうか」ということです。

北方領土は現在ロシアの不法占拠下にあります。法的には一度もロシアのものになったことはありません。ですから、ロシアが占拠していること自体がおかしいのです。しかし、ロシアが領土や領海も含めて北方領土を本気で奪おうとしていることも事実です。一方、日本は固有の領土である北方領土を手放すわけにはいかないのです。

北方領土は大変価値のある島々ですから、ロシアの返したがる気持ちはわかります。もっとも、国と国とが定めた約束はしっかりと守るべきですし、今までも、そしてこれからも日本のものとして扱っていくべきだと思います。しかしお互いに納得のいかない現状のままではどちらも利益は得られません。ですから、ロシアが納得して受け入れられるような解決策を考える必要があります。

そんなに簡単な話ではありませんが、私は領土はすべて直ちに返還してもらい、その後ロシアにとって利益になることとは何かということ、時間をかけて検討していけばよいのではないかと考えます。この意見は日本が損をするところが大きいのでなかなか主張しにくいのですが、相手も自分もお互いに利益を得ることができるよう方策を考えるべきだと思います。仮にその全てを取り入れることができなくても、一人でも多くの日本人がこの問題を考えていくなれば、日本全体としての返還を要求する力は強くなると確信します。

北海道など北方領土の近くに住んでいる人だけでなく、日本人全員がこのことを真剣に考えていくべきです。そして一日も早く日本が北方領土問題について悩まなくてもよい日がくることを願います。私は今後自分にできることは何だろうということを考えながら、北方領土問題の解決に力を尽くしていきたいと考えています。

優秀賞（KBS京都賞）

北方領土の未来について

南丹市立園部中学校 一年 工藤 嘉生

「一度は行ってみたい国。」それが、ぼくがロシアに対して持っている気持ちです。

ぼくは幼稚園の頃、父の似顔絵を描きました。それが展覧会で入賞し、ロシアのレニングラード州に送られ、そこの展覧会で展示されることになりました。海外の国を身近に感じたのは初めての経験です。「ロシアってどんな国なんだろう。」「どんな人たちが住んでいるんだろう。」何も知らなかった僕にとって、ロシアはとても遠い国で、その分魅力的な国に思えました。「いつか、ロシアに行ってみたい。」「もっともっと知りたい。」この思いは、変わることなく今もぼくの中で存在し続けているのです。

ぼくはこの前、北方領土についての学習をしました。北方領土は、択捉島、国後島、色丹島、歯舞群島の四つを合わせて言うそうです。戦後、日本の領土だったこの島々にソ連（ロシア）軍が入ってきて、住んでいた日本人を追い出して、自分たちの住み家にしてしまったらしいのです。僕はニュースで、「北方領土」という言葉を聞いたことはありますが、ここまではくわしく知りませんでした。このことを授業で知った時、ぼくは「ロシアが悪い」と思いました。だってそうでしょう。戦後突然やって来て日本人を追い出し、勝手に占領して、返してと言えば「ここはロシアの領土だ」と言い張り、入ってきた日本人を不法侵入だとして逮捕する。こんな誰がどう見たってロシアが悪いとしか思えないでしょう。

でも、だからといって、日本が強制的に島を奪えばどうなるでしょう。逆に今度は、そこを故郷にしているロシアの人々が追い出され、日本が今のロシアと同じことをすることになります。そうすればロシアの人もだまっていないでしょう。ただ同じことの繰り返しになってしまいます。本当にそれでいいのでしょうか。たしかに、歴史では日本の領土だったかもしれませんが、それがロシアに伝わっているのかどうか。ほかにいい方法はないのでしょうか。

ぼくは北方領土に行ったことはないけれど、写真で見る北方領土は自然豊かな資源のある島に見えました。それを日本とロシアと一緒に自然を守る開発すればいいのではないのでしょうか。自然を壊す開発ではなく、自然を残す開発のために、日本とロシアで手を取り合えたらいいと思います。そのために、日本はロシアともっと交流して、友好関係を深め、お互い信頼し合えるように努力すればロシアにもきくと伝わるとおもいます。ロシアも、その心を受け入れて、北方領土を開放し、日本人とロシア人が同じところで暮らせるようにする。その友好関係が今の世の中に必要なのではないのでしょうか。

「一度は行ってみたい国」だったロシア。北方領土を日本人から奪ったロシア。憧れていた国は、ぼくの国と多くの課題を抱えていました。でも、お互いの国に興味を持ち、より深く相手を知ること、少しずつ信頼という心が芽生えて来るのではないかと思います。中学生である今のぼく達にできることは少ないかもしれませんが、けれどもぼく達のこの考えが、未来の役に立てたらうれしいです。